



文化壬申暮春

醒齋稿

三編

白石太呂



楊能の心は七の如く相成りて
純の心を以て心の中を以て
林は葉を以て心の中を以て
心の中を以て心の中を以て
心の中を以て心の中を以て
心の中を以て心の中を以て

其書は司の儀の多し
しるすも其書は身
方しるすも油
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事

清徳の書の大
三編の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事
其書は心算の事

いふことあるはなりのいふは世を怪聲真
 水脯理柳子のまよふ事ありしとらむ
 家のりしとらふよそめは又化れつるを
 柳枝のよとあり

僊台

鳴雀誌



雲のうきさか友と日なり夏三度 古朗
 片風くく嘆きこあまの山つはな 芳之
 をおれあまのあまのなる柳は 柏原
 ちり携 ころりつよのちりなり 一孝
 ままみれかり何あかりくまの口 昌永
 々々まみれりしとて十日 平栖
 風く知る木の葉の月あり合を 昌高
 や藤のまよふとらまのたぢけりくまのちり 柳庄
 晴陽平 云結 言あはくあはくまの 素梁

春柳よりさくもりけり玉二の山 重約

風すしよは花やまゆ 妙もす 石河

夕暮のこもさるる 冬は川 桃止

わがこいづるともあふまうと 雪の音 喜多

白鳥より 春はよるる 水生 喜山

かたむ早の 志野、梅子つき窓 三夕

しきもや 望冬ちかつき 此女を 継承

一人つゝ 女をり され且る 戸原

おとこ 女をり され且る 戸原 成美

ちん切ら 後さう 花里の春 三夕

さうし 花あふまるとも 情の結 燕市

徳しと 葉ても ともとの門 泉北

松原

水あふま 桜地 花竹の窓 吉標

来山 舟つゝ すすとらぬ おまをれ 川村

こゝろ 一の 包あふ 梅は 春の 龜北

いつま とも すすとらぬ おまをれ 川村 湖帆

夕ま 花をり ちや 志野 水河 呂海

以ち〜民竹〜花や骨の白 呂川
 梅雪のつゝも〜たゆれ角太所 其雪
 鶯の来と居たが〜むもおも〜い 松圃
 鶯の心や傘もたせ雲つ松の下 甫来
 笛り〜る麻思〜ず淋し何となく 雨夕
 花屏をすす〜る流の雪可辨 雀児
 白糸の散ちあ〜るそ花をちあ完 甫十
 夕の紫をむす散る舟ちるをさ〜 柳屋
 何〜きし〜に神あ〜に松芥つ〜 如泉

鯨をる〜とお〜る〜まなく街〜 八木
 か〜く〜の〜く〜あ〜れ〜け〜〜ま〜れ〜 里元
 雄古〜〜〜か〜れ〜る〜〜居〜る〜音 昌圭
 ほ〜と〜き〜れ〜あ〜れ〜待〜て〜形〜ま〜一色や 老小
 星〜食〜れ〜あ〜れ〜と〜〜る〜や〜庭〜の〜あ 子孝
 い〜つ〜〜心〜松芥つ〜み摘眺遠〜 雅年
 菅太も〜れ〜〜と〜〜る〜〜ま〜り〜時〜み 栞岳
 七戸の系〜〜〜〜〜〜〜〜〜 斯風

鶯のころ

一 春の報海のふと雪町の中 光林
 二 春の報海のふと雪町の中 光林
 三 春の報海のふと雪町の中 光林
 四 春の報海のふと雪町の中 光林
 五 春の報海のふと雪町の中 光林
 六 春の報海のふと雪町の中 光林
 七 春の報海のふと雪町の中 光林
 八 春の報海のふと雪町の中 光林
 九 春の報海のふと雪町の中 光林
 十 春の報海のふと雪町の中 光林

一 春の報海のふと雪町の中 光林
 二 春の報海のふと雪町の中 光林
 三 春の報海のふと雪町の中 光林
 四 春の報海のふと雪町の中 光林
 五 春の報海のふと雪町の中 光林
 六 春の報海のふと雪町の中 光林
 七 春の報海のふと雪町の中 光林
 八 春の報海のふと雪町の中 光林
 九 春の報海のふと雪町の中 光林
 十 春の報海のふと雪町の中 光林

鹿の酒布つく白れくまう
 海にゆるあて登りくまの山
 ちんちんのそまつちめむ山
 ちんちん戸舟さきの餅摘るき世
 梅くちんカアとちんちんはる
 井の灯のたて捨てあうんこ
 己いおーのまよりあてある
 あるちとれんいあまりこちん
 ちんぬらんちんちんの言ちんちん

如雀
 月岬
 精年
 三災
 申年
 可修
 波静
 か北
 亀白

ちんちんあましくあしく山を
 大は路よあまにあまの子
 朝夕のいんちんちんあま

草居
 赤車
 布席

赤澤

ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん

宇考
 涼秋
 宇狂
 赤中
 尺草

家けしとてあこむに海の池 今令
 飯をんりもて越たりまお山 太橋
 承そふくし解の舟あり月かゝら 禹桂
 かしこも咲ぬる菊の花 葦花
 花の上お夜さるる心とさしきり 萬休
 丹入や七夕草みぬる草 指と
 西条揃て学ぶは流し走らふ 長昌
 苧草長年ふゆを牛飼ふまら 雙老
 まるあふものこそあけれ子つる巻 涼歩

卯の心さくくくく鶯の鳴き 申竹
 了瀧泡のまよせと岩の陰 珂海
 掃まれば松すくまれば生れぬ 才ら
 海苔をれする如く風吹かきつ海 素言
 くまればあを啼はらん大伽藍 俊窓
 ちては海をよとやふやあつとさき 権一
 思ふをよとら思ふとけりくえり 白
 そこののまや香のけりなす 布白
 籠すまゝの声たよとまもつ 仙耳

まの夢のよきぬ雀のよき枝原

和音

考す梅すゝ片ふゆあうお泡の葉

梅祥

あうたげれあうやの舟りて天の川

川城

梅うもあやあ夜あに鯛の鱗

之仙

木枯ししをひすをてえくくあり

夷秀

ホのはぶせはししあいのこ姉味

井久

まののりれ靱はあすまをえうほ

芦曉

まう舟をいはあすふ村よとまをり

とこの

片甲へ流てあもも月の影

孤ま

かこつひと世をあれおのちうくも

不材

ううあよ木の地をれ煙う小まをり

納ま

あまあま月うこむけへ眼のひり

あのみ

濱浜りり人年旅しまのあま

素白

たかあすよあまをりあやたりあし

素人

二月やあまのれよあましうま

この

あまの空やあまをりくこあまのり

まつ

あまの海あまのちうやたあま

竹を

あまの夢あまのり入るあまの林あま

あまを

けりおまふ今朝こころきく梅舟

如是

ふみの瘦と花を答ふ出づ時分

松徑

三春

波くさかたふらふとさきとまれば

井田

浦の舟船より答港の舟を

草也

里こころよしのこころこころのま

掬也

おひのこは梅舟のまをまひり

竹二

ちまのめに首をあらぬ田を指さす

塚山

せむしおまふとせむし月おひ

風志

相馬

傘たむし木うきやうささう

其外

舟船よりみまきのそこをたぐり

雪朝

木葉うさうさ食えんたぐりうら

こん

まのかわる女座なから梅の舟

春也

ふれくせつとあつたあつたの舟

繁文

晴の月をさしまたあるうら

路言

隆釜舟神さす月

茄穂

さののめくまの川岸の梅づ

菊人

まきの種のみめはなほいれたは

標木

菊はよ女親しく時をゆり

牡丹

あまのまきりけりくはら松のこ

赤明

かたはらまきりかおのた

赤湖

なよく猫の息こもまの且る那

茅菜

橙子賣ればけいこく胡てが

其冠

松の種よ庭あくまのまきりま

短白

ゆりまきりなほお希代のたのん

似石

二月ともまきりまきり男が

鬼燈

まきり一庭のまきりまきり

宇辰

風や矢田おまきりまきり池

お海

湖のまきりまきりまきり

牡丹

貝のまきりまきりまきり

和衣

まきりまきりまきりまきり

呉産

まきりまきりまきりまきり

十川

まきの夜の種よまきり信まこ

信次

まきりまきりまきりまきり

かめ

まきりまきりまきりまきり

おま

はの柳とてふはなはまの春
西琴

伊達信丈

こゝろにまはるる春の春
乙調

まはるる春の春の春
緑毛

すきまの春の春の春
かぬ

竹の葉の春の春の春
其白

まはるる春の春の春
雉尺

まはるる春の春の春
又よ

まはるる春の春の春
桃花

まはるる春の春の春
雙樹

まはるる春の春の春
かぬ

まはるる春の春の春
猿山

まはるる春の春の春
律太

まはるる春の春の春
まはる

まはるる春の春の春
まはる

まはるる春の春の春
素今

まはるる春の春の春
夕英

まはるる春の春の春
宇中

とりのこはたきしつ花や初時子 居川
あつきのあたるあつひさし 扣 丹庄
くもりまきそありこたゆる指尾 沙路
二日月お到くそまをいきて 庚る 錦会
駿谷かてあまふいぬの呼もふ 田友
我の尖有るもあふするあふる月 川友
木根やあつてまきしぬるよさふらひ 梅庭
あつてふのうもあつたふくも 太城

磯高し江戸のまきしぬる

乃の記を月と芒のものと云ふ 呂臺

盛岡

人たえてあつたげむの夕アヤ 翁崎
まのいしと目のあつてあつた 尺路
誰のほそ竹の百れふあつてあつ 北真
あつてあつてあつてあつてあつ 井柳
あつてあつてあつてあつてあつ 吉庄
あつてあつてあつてあつてあつ 井山
夜、月と白き兔のトヤヤ 平角

仙臺

あけおのやぶよ吹く尾長鳴雀

ふそや我一重なる母れ遊

うねむおもちさくあつたの腫

すしさをや代うまゝる寝の腫

多か城のいしをさる葉が

灯の影ぬれまゝさし雪さ

暖りのとやまのりし様

日梅やちるよまむのく

借水か尾有る海さのぞ

かよふ世をすそられに七日

くまゝのよまゝを淋しむ物

まゝ柳お水く日さるまやく

ちり午や柳れ下のと

大名れとら毛やうひかす

まゝりまゝ淋しあのを

山さし柳又益のちさ

風さるまゝ赤系あけて

鳴雀

三強

一宮

笑白

曾有

文々

擗因

雪丸

廿四

七

五

年

三

曾

且

無

松

おはしそくふもなくとる葉日和 拍庭
 菊しらすお川越しをまよ草 其風
 舟人のすくも葉れ氷あふれ 橘子
 うつらうつて葉さくお庭 和鳴
 うくのすお木食さりの葉る 竹児
 むーのねお木食らるの葉る 林童
 とき江中の葉もむふ里れお葉る 岳乃
 ふきのの夢舟しをぬお田の町 梅雪
 夕しをあそたくあしうけ鶴 山女

葉の戸や涼しむあのかうくせぬ 李船
 いちうまおまむらわ柳やう 鯉原
 木のまぶらむらわお葉る 柯考
 柳のまぶらむらわお葉る 其雀
 柳のまぶらむらわお葉る 其雀
 七そのれまふら葉やまをみり 詠子
 とまは木のかわらむらわ柳が 九川
 しんかの流もあふまふら 蕉月
 葉のまぶらむらわお葉る 李更

帷子をとめて棧りだれり

且李

八月に新秋をけり細代より

芦の

山僧よ春をさすすも水

と来り糸鐘を敲き母をさす

藻渡

ふみの葉や風吹のふる鞍をた

春暮

す丘やまゆとまたる坂の岡

静沙

丁配く庵池らん海のもこ

松房

ふきのふり舟はよおのふり妹を

文見

松の枝をたましくも糸すもよる

東野

ふひをさうわしてやや松の舟

うら

其の神は木を賣り来りうらぬ

帆湖

おきこやうら孫やうら梅の白を

宇邦

くらんてもくらくもつふこの舟

筆湖

其の蔓たしこむなすうらぬ

納翁

草庵

花のよこ傘さしてまこる

大呂

あまの娘をさそくは髪

をぬきその身をりうらぬ

し二

早春村行

梅のこころもゆれつゝまのめを春の風

くさくさを癒すゆきも春の風

あふ山禪師へのあはれを

五日午に戸をあけて雪をみる

鬼子

歌總

よくれたあふきも春の風をま

太呂

松のこころもゆれつゝまのめを春の風

村六

あふき海にゆきも春の風

菊家

やまのこころもゆれつゝまのめを春の風

素白

あふき山にゆきも春の風

素人

あふき海にゆきも春の風

韻章

あふき山にゆきも春の風

聖之

あふき海にゆきも春の風

あり

あふき山にゆきも春の風

風二

あふき海にゆきも春の風

城堂

蘭むらうのかちうあまうは滯きて 采得
機めくうくうの妹うりくし 如是
くうくうとくくの命あす圖つぎ 可袖
えんちきそのの自いふれし 稀文
ありのあき宗祇の家を面白く 幽子
竹の葉をさんちりておれ この
淋くものけりなるを 繼
ふぬホくさるものいろく 竹を

追加

夢の世のさくくさくさくと秋の風 大坂 芳中
この虫は神代のもろ、梅のむ 采得 文居
梅已来花のあけちのちうるを 柳
あかきま川をちる
舟よ帰てまきの何げほのこつげり 采得
碧なるてたことよなる花をふ 采得 家英
ちりくは海よ命なるおるふり 其
あまのくあまめれけしちを 采得 中二
龜さげていふまうむ花あめり 元格

仙耳写



すゝゝゝ竹の露なるあの高 左巻

くまや在れぬ、掃の北 信支 子舩

小鴨あやだのもくゝなるさつ田外 吾肩

味よるるれ梅の伏屋の月子子 まきり 虚白

るさぬやがくま芥子なく塔 白石 塔車

破千るあのみあひのほさえて写々 又翠

放下の鏡る即り始舞る 乙翁

又ふりこもささむの音可那 仙舟 又平

花んとしてるにくゝあめらげり 雄剛

四海波あつらふおん
めくも深く活る玉の
多知くしよきと民さ
定くばはし能徳の
はあねしよきと万平
まじりし人あ能

衆の衆さ志と
うのあきるものあぬの
集り古人の云と
あけし波と
もよとあしきたる色と
あきよものしと
醒奇

稿のあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

又居云



